

「若宮丸漂流物語」自費出版

石巻市出身の作家、大島幹雄さん(63)＝横浜市在住＝が、江戸時代に日本人で初めて世界一周を達成した千石船「若宮丸」の船乗りたちの姿を描いた小説「我にナシエージタあり 石巻若宮丸漂流物語」を自費出版した。大島さんは「多くの謎に私なりの解釈を加えた。世界史上の壮挙を広く知ってほしい」と話している。【渡辺豊】

石巻市出身の作家 大島幹雄さん



「我にナシエージタあり 石巻若宮丸漂流物語」を自費出版した大島幹雄さん

大島さんは全国的な市民グループ「石巻若宮丸漂流民の会」の事務局長を務め、漂流民が日露交流などで果たした意義を顕彰し続けている。今回の作品は東日本大震災後の2012、13年、地元紙「石巻毎日新聞」で連載し

た作品を基にまとめたもので、B5判200頁の大作だ。作品名のナシエージタはロシア語で希望を意味する。作品に登場する若宮丸は1793(寛政5)年、乗組員16人と米や材木を載せ、江戸に向け石巻を

出航。しかし嵐に遭いアリューシャン列島に漂着、シベリア滞在後に当時のロシアの首都ペテルブルグに呼ばれた。酷寒により亡くなった、ロシアでの永住を決断したりする乗組員が出る中、寒風沢(塩釜市)の津太夫ら

ている。

大島さんは「特別な英雄もない船乗りたちが、異国で力を合わせ支え合って苦難を乗り越えた史実は、古里の震災被災者に重なった」といい、「漂流民の世界一周は空前絶後。現代に通ずる世界的な交流のきっかけになり得るのでは」と話している。

大島さんは、ロシア語を猛勉強し通訳とし

世界史上の壮挙知って

4人はロシア船「ナシエージタ号」に乗り、大西洋と太平洋を経て13年ぶりに帰郷した。その見聞は蘭学者、大槻玄沢の「環海異聞」で世に知られた。

大島さんはロシアでの現地調査も踏まえ、漂流民らの足跡を克明にたどりながら、ロシアに残った乗組員の善六らの真意や、漂流民同士の相克の真相など、史料だけでは分からない謎に大胆に迫っている。

「日露の懸け橋」を800円(税別)。問目指した善六を主人公にした作品を構想しているという。「我にナシエージタあり」は18185。

8185。